

ペット意識尺度の再検討の試み

——ペットブームを支えるペット意識の構造——

松田光恵・川上善郎

キーワード：ペット，コンパニオン・アニマル，ペットロス，ペット意識尺度，ヒト-ペット関係

1. はじめに

1-1 問題

近年は空前のペットブーム言われ、多くの家庭でペットが飼われるようになってきた。ペットブームはここ20年ほど続いており、第1次ペットブームは1980年代後半から90年代初めに起こり、第2次ペットブームは90年代後半から現在に至ると言われている（内藤、1996）。そのペットブームはまた、経済的にも大きな効果をもたらしている。ペット関連産業は不況知らずであり（クリップ生活研究所、2002）、またその市場は「核家族」や「少子高齢化」などを背景に急速な市場拡大を果たし、『1兆円市場』と言われている（矢野経済研究所、2005）。

2003年に総理府が行った『動物愛護に関する世論調査』によると、日本におけるペット飼育率は36.6%であった。過去のデータと比較するとその増加率は横ばい傾向にある。これらから考えられるのは量的観点からのペットブームには落ち着きが見られたとの解釈だが、ペット産業の市場拡大などを背景に我々の生活にペットが定着し、より親密な新たな関係が生まれてきているのではないかと推測される。

同じ調査によると、コンパニオン・アニマルと暮らすことで「気持ちや和らぐ」ことや、「生活に潤いや安らぎが生まれる」「家庭が和やかになる」といった回答が5割近くを占め、コンパニオン・アニマルという存在が我々に精神

的・情緒的に大きな影響を与えていることが分かる。これらは我々とペットとしての動物の距離がより身近で親しいものになりつつあることの一つの徴候である。

さらに最近ではペット（愛玩動物）という呼称を嫌い、コンパニオン・アニマル（伴侶動物）という呼び名を使う傾向にある。コンパニオン・アニマルとは「伴侶や家族のような関係で、人間の側にいる（人間に飼育されている）動物のこと」（三省堂大辞林）である。コンパニオン・アニマルという言葉の背景には、飼い主と飼い慣らされた動物という主従関係ではなく、家族の一員としてペットを扱いたい、という心理が働いていると解釈できる。

このようにヒトはペットに対し、親密な関係を結べる対象であると位置づけているのではないかと考えられるが、その親密な関係にあるペットを喪失した際におこるペットロスとは社会的な問題になっている。横山ら（2005）は、「ペットロス自体は当然出現する反応であり、それ自体は病的ではない」としながらも重大なペットロスを引き起こした場合、こじれると大きな問題がおこるとしている。問題の状況としては①社会的不都合が生じる時（学校や職場に行けなくなる）②病的になる時（重度の鬱状態やアルコール依存）③次のペットが飼えない時（ペットロスの蔓延化）④ペットロスが全くない時（性格障害の一種と密接に関係）等があげられている（横山ら、2005）。一般にペットロスとは「飼い主はまるで家族を亡くしたような深い悲しみに陥り、それらは獣医療でも問題になっている」（濱野、2004）とされている。ペットに深い愛着を持ち、過度に愛情を注いだ結果、ペットを失った人はペットロスに陥る、といったプロセスを我々は経験するのである。そのペットロスの程度の差は対象に対する愛情の深度にもよるであろう。重度のペットロスは極度の抑うつ状態を引き起こすなど、精神的健康にもかかわってくる。

また、ペット＝動物である、といった一般的社会通念から、ペットロスに陥った人々に対する周りの無理解、（例えば「ペットの死はヒトの死とは重みが違う」「世の中にはもっと大事なことがある」など）により、ペットを失ったことによる悲嘆感情が社会的に認知されていないためペットロスは深刻化する、といった見解もある（香取、2004）。このようにヒトとペットの間の情緒的關係や絆が強固であるほど、ヒトはペットを喪失した際に重度の心理的問題、ペットロスにぶつかることになる。ペットロスに対する知見は多々輩出さ

れているが、今後もそのプロセスの解明や対処法などの具体案が提出され、そのことが一般的に認知されなければならない。

以上のように、ペットという動物が、あたかも人間と同じような存在として扱われ、ペットを飼う人々に大きなインパクトを与えているのである。

そこで、ヒトとペットとはどのような関係にあるのか、が問題となってくる。ヒトとペットの関係を評価する尺度には、Pet Attitude Scale (Templer, 1981)、Companion Animal Bonding Scale (Poresky, 1987)、Pet-attachment Index (Stallones, 1988)、Pet Relationship Scale (Lago, 1988)、Lexington Attachment to Pets Scale (Johnson, 1992)、Comfort from Companion Animals Scale (Zasloff, 1996)があり、その一部は翻訳されて我が国の研究に用いられているものもある(安藤・日本語訳、1999)。

しかし、これらの尺度は日本におけるヒトとペットの関係を表しきれぬのだろうか。ヒトとペットの愛着関係は欧米の研究結果とは異なるという知見(金児、2004)や、ペットの所有は孤独感を低減する(Zasloff & Kidd, 1994)とされた結果に対し、ペットの所有は孤独感とは関連を持たない(諸井、1984)との研究結果もみられる。このように日本と欧米においてペットと飼い主の関係に関する異なった知見が得られている。これらの結果を踏まえ、日本におけるヒトとペットの関係、またはペットに対するヒトの意識を探る尺度を構成することは、真のペット理解につながると考えられる。

1-2 研究目的

本研究の目的は、ヒトはペットの存在をどのように位置づけているのか、その意識を探ることにある。本研究がとるペットについての基本的な視点は次の2項目に要約できる。

第一に、ペットとは飼い主にとっての理想的表象であると考えられる。時にペットとは自分の望む相手に姿を変え、擬人化される。家族のように、子どものように、恋人のように話を聞いてくれる存在である。飼い主は好みのペットを選ぶことができ、自分のプライドを満たしたり、気持ちを慰めることができるなど、ペットの存在が自己に大きな満足感を与える。さらに飼い主はペットに対し支配権を持つ。ヒトとペット、この二者は主従関係にある。例えば、給餌や日常の世話、健康管理などは全て飼い主の手に委ねられており、飼い主は

ペットに対して絶対的な権限がある。飼い主の気持ち一つで如何様にでもなってしまうのだ。このようにペットとは飼い主の欲求に則した道具的側面の強い存在である。

そしてこの側面が強調された結果として考えられる社会的問題点は、ペットブームに煽られた無責任なペット飼養である。テレビや雑誌にはかわいいペットが溢れている。情報はペットの流行をつくり、飼うだけでいいことずくめのように我々を錯覚させる。上述のように、ヒトはペットに理想的表象を求めがちであり、自己の欲求を満たしたいと考えるものである。しかし、人間との種の違いや動物生体への無理解のまま安易なペット飼養をおこなうことは、双方に不幸な結果を招く。今後はこの分野の研究がすすみ、ヒトとペットのよりよい社会環境を整えることが課題である

第二に、ペットとは飼い主の情緒の対象であると考えられる。飼い主にとってペットとは一方的に愛情を注ぐだけの相手ではない。飼い主は自分のペットについてお互いに感情が理解しあえる存在と捉えている。ペットと深い関係を築くことで、相互に精神的な利益を享受することができる。ペットの世話をする過程で、責任感の芽生えや、愛情が深まるなどの結果、二者間に相互理解的絆が生まれる。さらに飼い主はペットからは癒しや愛情、信頼感など様々な情緒的サポートを供給される。例えば老人や精神疾患に病んでいる人達が、アニマル・セラピーをうけることにより精神的・身体的に劇的な変化をみせる(横山、1996)などの例は最たるものであろう。ペットとは飼い主の心理的欲求を満たす存在である。

本研究の目的は、上に述べた2つの視点をベースとし、ヒトにとってペットとはどのような存在であるのか、なぜヒトはペットを飼うのかその動機を探るものであり、ヒトとペットの関係を明らかにするものである。現在のペットブームを支えているペットに対する意識構造を明らかにし、ペット意識尺度を再検討することを目的とする。

2. 分析方法

2-1 ペット意識尺度の7領域

研究目的に述べた PAS (ペットに対する態度尺度)、CABS (人とペットの

関係を測定する尺度)、PAI (ペットに対する愛着を測定する尺度)、PRS (ペットに対する態度とペットとの関係尺度)、LAPS (ペットに対する愛着を測定する尺度)、CCAS (飼い主がペットから受けた情緒的な快適さ尺度) の6尺度をベースとし、下記に示す独自の領域を設定した。領域は大きく、(1)ペット飼育に関する意識 (飼育理由、利点、リスク、他者とのコミュニケーション) (2)ペットに対する愛着 (ペットに対する愛情、ペットへの感情、ペット喪失) (3)ペット飼育 (ペット飼育の喜び、ペット飼養態度・姿勢) (4)ペットとの情緒的な交流 (ペットとの情緒的な絆、ペットから飼い主への信頼、愛情豊かな行動) (5)ペットから得られる効用 (ペットからの心理的サポート、ペット飼育による効果、ペットを介した他者との交流や影響) (6)ペットに対する一般的感覚 (一般的ペット観、ペットとの一般的交流、動物の権利や福祉) (7)ペットの擬人化 (人の代替としての関係、家族との対等性) とペットに対するコントロール感、の7領域である。以下各領域について説明する。

(1) ペット飼育に関する意識について

ペット飼育に関する意識について、飼育理由や飼育に関する利点やリスク、他者とのコミュニケーション、の4次元について測定を試みた。2003年に総理府が行った『動物愛護に関する世論調査』を踏まえ、質問項目を作成した。さらに、ペット飼育に関しての利点を示すもの (「毎日が楽しく過ごせる」「心が安らぎ癒される」「家族の話題が増えコミュニケーションが円滑になった」等)、リスク (「外出が難しい」「抜け毛・ふんの始末が大変」「エサ代や病院代にお金がかかる」等)、ペットを介して他者とのコミュニケーションが発生、又は発展したのか (「ペットを通じて近所付き合いが深まる」「公園でペットを介した交流がある」等)、を加え、47項目の質問を設定した。

(2) ペットに対する愛着

ペットに対する愛着について、ペットに対する愛情・ペットへの感情・ペット喪失、の3次元について測定を試みた。愛着とは「ある特定の間もしくは動物と、他の特定の間もしくは動物との間に形成された情緒的絆である」(Bowlby, 1996) とされている。愛着行動を他に対する情緒的で親密な距離を求めようとするものと解釈し、ペットに対する愛情や感情、又は最愛のペット

の喪失も視野に入れ、幅広くペットに対する愛着と捉えた。PAS、PRS、LAPS、CCAS を踏まえ、質問項目を作成した。さらに、ペットに対してどのような愛情を抱いているか、ペットの存在とは何か、ペットに対する好意的な態度、愛情豊かな関係を示すもの（「守りたい」「愛している」「ペットのためにどんなことでもする」「誇りに思う」等）、ペットに対してどのような感情を抱いているか（「見ているのが楽しい」「大切なものである」「面白い」「邪魔だ」等）、ペットを失うこと（失ったこと）についてどのような思いがあるのか、ペットが自分にとってどのような関係にあるのかを示すもの（「自分のペットが死んでしまうことを想像すると気分が落ち込む」「私は自分のペットが亡くなったら悲嘆にくれるだろう」「ペットがいなくなることは考えたくない」「ペットが亡くなればまた新しいペットを飼えばよい」等）、を加え、15項目の質問を設定した。

(3) ペット飼育

ペット飼育に関して、ペット飼育の喜び・ペット飼養態度・姿勢、の2次元についての測定を試みた。PAS、CABS、PRS、LAPS を踏まえ、質問項目を作成した。さらに、ペット飼養に関する喜びを示すもの（「エサを食べるのが好き」「飼うのが好きだ」「寝顔を見ると幸せな気分になれる」等）、ペット飼育に関して、躰などの飼養態度・姿勢、を示すもの（「世話に責任がある」「獣医に連れて行く」「甘やかしている」等）を加え、15項目の質問を設定した。

(4) ペットとの情緒的な交流

ペットとの情緒的な交流について、ペットとの情緒的な絆・ペットから飼い主への信頼・ペットへの愛情豊かな行動、の3次元について測定を試みた。PAS、CABS、PAI、PRS、LAPS を踏まえ、質問項目を作成した。さらに、ペットとの情緒的な絆といった視点から、ペットと飼い主が情緒的な関係にあるか、相互にどのような反応をするのか、どのような絆を感じているかを示すもの（「信頼している」「親密な関係だと感じる」「ペットの気持ちを理解している」等）、ペットから飼い主への信頼感といった視点から、ペットが飼い主のことをどのように感じているかを示すもの（「飼い主を慰める」「飼い

主の気持ちを理解している」「呼びかけに応えている」等) ペットへの愛情豊かな行動といった視点から、ペットとの情緒的な交流や接触、相互の身体的活動や行動を示すもの(「話かける」「特別な日にプレゼントをする」「一緒に寝ている」「抱いたりなでる」「旅行をする」等)を加え、21項目の質問を設定した。

(5) ペットから得られる効用

ペットから得られる効用について、ペットからの心理的サポート・ペット飼育による効果・ペットを介した他者との交流や影響、の3次元について測定を試みた。CABS、PAI、PRS、LAPS、CCASを踏まえ、質問項目を作成した。さらに、ペットから受ける心理的サポートとして、ペットと暮らすことで受けている心理的恩恵、ヒトとペットとの情緒的側面を示すもの(「ペットは親密な関係を与えてくれる」「ペットは幸せな気分にしてくれる」「ペットによって何か愛するものが与えられている」等)、ペット飼育による効果として、ペット飼育より得られる身体的、具体的効果を示すもの(「ペットにより健全な生活ができる」「活動的な生活にしてくれる」「体を動かすことが多くなる」等)、ペットを介した他者との交流や影響として、ペットを飼っていることで他者との間に生まれるコミュニケーションや影響を示すもの(「ペットの写真を人に見せるのが楽しい」「ペットのことで他の人と話をする」「ペットを通じて友人ができた」等)を加え、24項目の質問を設定した。

(6) ペットに対する一般的感覚

ペットに対する一般的感覚について、一般的ペット観・ペットとの一般的交流・動物の権利や福祉、の3次元について測定を試みた。PAS、CABS、PAI、PRS、LAPSを踏まえ、質問項目を作成した。さらに一般的ペット観として、ペットに対して深い愛着や特別の感情移入を持っていない、ペットや動物への一般的な感覚を聞いたものであり、ペット及び動物全般に関する態度を示すもの(「動物が好きである」「ペットはペットにしかすぎない」「動物は野生か動物園で飼うべき」等)、ペットとの一般的交流として、人とペット相互の活動を示すもの(「一緒に散歩する」「一緒に遊ぶ」「ジョギングをする」等)、動物の権利・福祉として、ペット及び動物全般の権利や福祉を示すもの

(「人間と同じくらい尊敬されるものである」等)を加え、29項目の質問を設定した。

(7) ペットの擬人化とペットに対するコントロール感

ペットを擬人化することについて、人の代替としての関係・家族との対等性、の2次元について測定を試みた。PAS、PAI、PRS、LAPS を踏まえ、質問項目を作成した。さらに、人の代替としての関係としてペットを友人や子供のように捉え、擬人化して扱うことを示すもの(「かけがえのない伴侶である」「友達である」「子供みたいだ」等)、家族との対等性としてペットを家族同様の対等のものとして捉えていることを示すもの(「家族の一員である」「家族同様尊敬の念を持つべき」「かけがえのない代わりの利かない存在」等)を設定した。ペットに対するコントロール意識についての項目からは、ペットをコントロール可能なものとみなしているか、飼い主が主導権をもった存在であるか、を示すもの(「ペットは忠実だから好きだ」「評価しないから愛している」等)を加え、16項目の質問を設定した。

2-2 調査方法

上記7領域の167項目と、回答者のデモグラフィック要因(年齢、性別、家族構成、住居形態)、及び飼っている動物の種類と頭数、飼い始めた理由、毎月の飼育代、ペットの世話をしている人、ペットを飼っている理由から質問紙を構成し、現在ペットを飼っている対象者に質問紙調査を実施した。調査対象者は、岡山県のA普通科高校に通学している家庭でペットを飼っている61名(高校生:57名 成人:4名)であった。調査時期は、2006年9月4日から24日に実施。調査票は学校に依頼しこれらの対象者に直接配布、回収を行った。

なお、これらの対象者の飼育動物は、犬73.8% 猫21.5% その他(魚類・鳥類・哺乳小動物)27.7%であった。また、犬と猫の品種は、犬雑種33.3%・犬純血種66.7%、猫雑種85.7%・猫純血種14.3%であった。

2-3 分析方法

上記7領域について、それぞれ主成分分析:バリマックス回転による因子分析をおこなった。

3. 結果

それぞれの領域について因子分析した結果について述べる。

3-1 “ペット飼育に関する意識”

(1) ペットを飼う理由について

『ペット飼育に関する意識（飼う理由）』に関する14個の質問項目について因子分析をおこなった結果、4因子が抽出された。第1因子は Q2_10「孤独感や寂しさを紛らわすため」 Q2_9「ストレス解消や気分転換になるから」 Q2_4「防犯等に役立つから」 Q2_8「家庭内のコミュニケーションがうまくいくから」 Q2_14「家族が欲しがったから」 Q2_13「たくさんの家族と過ごしたいから」 Q2_11「ペットを飼うのが流行しているから」であった。ペットを飼うことで飼い主自身の慰めや気晴らしになり、ペットの存在が家庭の中で何らかの役割を果たすことを期待しているものと解釈された。この因子は「存在役割」因子と名付ける。

第2因子は Q2_1「気持ちがやわらぐ（まぎれる）から」 Q2_6「動物好きだから」 Q2_5「かわいいから」であった。外見や仕草のかわいい動物をペットとして飼うことで精神的な安らぎを得ていることを表している。この因子は「愛玩」因子と名付ける。

第3因子は Q2_12「子供を育てるような感覚をあげたいから（又は子供がいなくて寂しいから）」 Q2_2「子どもの情操教育のため」 Q2_11「ペットを飼うのが流行しているから」であった。ペットとの生活は、誕生・老い・死といった動物としての“生”を経験する。そのような価値を子供に与えたい、または、ペット自体を子供のように育てていくことで満足感を得たい、といった気持ちの表れと解釈される。「養護意欲」因子と名付ける。

第4因子は Q2_7「伴侶となる動物（コンパニオン・アニマル）だから」 Q2_3「捨てられているのを見て可哀想だったから（又は、捨てるのがかわいそうだったから）」 Q2_8「家庭内のコミュニケーションがうまくいくから」であった。家庭内でのペットを伴侶動物と考えることは、そこに精神的な絆が存在するから、と捉えることができる。またここではそのペットの存在によって

家族間のコミュニケーションが良好になることを表している。「情緒的役割」因子と名付ける。

ペット飼育に関する意識（飼育理由）に関する項目は、“存在役割”“愛玩”“養護意欲”“情緒的役割”から構成される。

(2) ペットを飼う利点

『ペット飼育に関する意識（利点）』に関する13個の質問項目について因子分析をおこなった結果2因子が抽出された。第1因子は Q6_11「心が安らいだり、癒されたりする」Q6_13「毎日が楽しく過ごせる」Q6_12「家庭が和やかになった」Q6_1「家族の話題が増え、コミュニケーションが円滑になった」Q6_2「ストレス解消や孤独感の癒しになった」Q6_6「生きがい、責任感、使命感が増えた」Q6_5「家族のきずなが強まった」Q6_3「世話をするため生活にリズム感ができた」であった。ペットを飼うことで飼い主の精神的な満足感や快適さが増す、といった非常にポジティブな側面が現れている。または飼養に関する責任感が芽生え、家庭内での良好な関係が促進されているなど、ペット飼養の結果、自己に心理的な“快”がもたらされるという気持ちの表れと解釈される。「心理的安定」因子と名付ける。第2因子は Q6_5「家族のきずなが強まった」Q6_9「インターネットの中にペット仲間の友人が増えた」Q6_8「近所にペット仲間の友人が増えた」Q6_10「子供が元気になった」Q6_7「防犯等に役立った」Q6_3「世話をするため生活にリズム感ができた」Q6_4「一緒に遊ぶことで運動になった」であった。主に、他者との新たな関係が生まれたこと、または発展したことを示している。ペット飼育の効果として、ペットと自己の関係を良好なものにするだけでなく、他者との関係においても好ましい影響があることを示している。「快作用促進」因子と名付ける。ペット飼育に関する意識（利点）に関する項目は、“心理的安定”“快作用促進”から構成される。

(3) ペットを飼うリスク

『ペット飼育に関する意識（リスク）』に関する13個の質問項目について因子分析をおこなった結果3因子が抽出された。第1因子は Q7_2「抜け毛・ふんの始末が大変」Q7_4「ペットの健康管理が難しい」Q7_1「泊まり掛けでの外

出が難しい」Q7_6「日中不在時の対応が大変」Q7_3「エサなど毎日の世話が
大変」Q7_11「エサ代や病院代などのお金がかかる」であった。ここでは糞尿
の始末や毛の処理、世話に関する大変さ、など生活上発生するペット特有の問
題が示されている。「本質的問題」因子と名付ける。

第2因子はQ7_8「近所から苦情が寄せられる」Q7_10「ペットのために病
気やケガをした」Q7_7「訓練やしつけが大変」Q7_5「世話をめぐって家族で
もめる」であった。第1因子と比較すると問題はペット固有のものではなく、
ペットから発生した二次的な問題である。「副次的問題」因子と名付ける。

第3因子はQ7_12「家が汚れたり、臭いが気になる」Q7_13「鳴き声が大き
い」Q7_9「生理や出産の対応が大変」Q7_11「エサ代や病院代などのお金か
かる」である。第1因子と比較すると、ペット特有の本来的な問題といった
意味合いは薄く、飼い主自身が不快に感じる主観的、感覚的問題であると解釈
される。「感覚的問題」因子と名付ける。

このように、ペット飼育に関する意識（リスク）に関する項目は、“本質的
問題”“副次的問題”“感覚的問題”から構成されている。

(4) ペット飼育と他者とのコミュニケーション

『ペット飼育に関する意識（他者とのコミュニケーション）』に関する7個の
質問項目について因子分析をおこなった結果、1因子が抽出された。Q8_4
「近所のペットが話の話題になる」Q8_3「散歩時に自分のペットについての話
をする」Q8_2「ペットを通じて近所付き合いが深まる」Q8_1「ペットが近所
の話題になる」Q8_5「ペットは近所の人にかわいがられている」Q8_6「ペッ
トを預けたり預かったりする」Q8_7「公園でペットを通した交流がある」で
ある。ペットの関係を通して、人間同士の関係が発展していることを表してい
ると解釈する。「社会的相互作用活性化」因子と名付ける。ペット飼育に関す
る意識（他者とのコミュニケーション）に関する項目は、“社会的相互作用活
性化”から構成されている。

3-2 “愛着”

『②ペットに対する愛着』に関する15個の質問項目について因子分析をおこ
なった結果、4因子が抽出された。第1因子はQ9_6「ペットを見ていると楽

しい気分になれる (CCAS)」 Q9_10「ペットは面白い」 Q9_1「私は自分のペットを愛している (PAS)」 Q9_7「私の生活にペットがいなければさびしいだろう (PRS)」 Q9_8「自分のペットはかけがえのない大切な存在である (PRS)」 Q9_2「外出先でもペットのことが気になる」などであり、既存の尺度、PAS、PRS、CCAS が混在している。ペットの存在を常に身近に感じ、そのことがポジティブな感情を生起させることを示している。「快感情」因子と名付ける。

第2因子は、 Q9_3「ペットの世話をするためなら、どんなことでもするだろう (LAPS)」 Q9_5「私は何を犠牲にしても自分のペットを守るだろう」 Q9_4「自分のペットを誇りに思っている」 Q9_15「ペットの死について私には責任がある」などであり、既存尺度の LAPS が入っている。ペットに対し責任感を持ち、自己犠牲をも厭わない態度を示している。「献身」因子と名付ける。

第3因子は、 Q9_12「亡くなったペットのことは辛いので思い出したくない (又は想像したくない)」 Q9_13「自分のペットが亡くなったら悲嘆にくれるだろう」 Q9_8「自分のペットはかけがえのない大切な存在である (PRS)」 Q9_11「自分のペットが死んでしまうことを考えると気分が落ち込む」 Q9_7「私の生活にペットがいなければさびしいだろう (PRS)」などであり、既存の尺度の PRS が入っている。ペットの死に直面した際、自分がどのような感情をもつ (もった) のか、ペット喪失感情を示すものであり、またペットの精神的な存在性を示している。「精神的支柱」因子と名付ける。

第4因子は、 Q9_14「ペットが亡くなればまた新しいペットを飼えばよい」 Q9_19「ペットに対して腹が立つ・邪魔だ」などである。いずれも反転項目であり、ペットに対する嫌悪感情はなく、ペット自体を二つとない、かけがえのない存在と考えていることを示す。「唯一無二」因子と名付ける。

ペットに対する愛着に関する項目は、“快感情” “献身” “精神的支柱” “唯一無二” から構成されている。

3-3 “飼育”

『ペット飼育』に関する15個の質問項目について因子分析をおこなった結果、4因子が抽出された。第1因子は Q10_3「ペットを飼うことで幸福だと感じることもある (LAPS)」 Q10_1「私はペットを飼うのが好きである (PAS)」

Q10_2「ペットがエサを喜んで食べるのを見るのが好きだ (PAS)」Q10_4「ペットの寝顔をみると幸せな気持ちになれる」Q10_5「ペットの世話には責任がある (CABS)」などであり、既存尺度のPAS、CABS、PRS、LAPS が混在している。意味的にはペットの世話に責任を持つことも含め、ペットを飼うこと自体がヒトに満足感を与えていることを表すと解釈された。「飼養的満足」因子と名付ける。

第2因子は Q10_9「ペットを風呂に入れてきれいにしたり、ペットの毛づくろいをしたりすることに多くの時間を費やしている (PRS)」Q10_11「定期検診や予防注射のためにペットを獣医に連れて行く (PRS)」Q10_10「私とペットとの関係を他人に干渉されたくない」Q10_8「他人に迷惑をかけないようにペットの躰には気を遣っている」Q10_12「ペットの望みをなんでもかなえてあげたい」Q10_13「私はペットを甘やかしていると感じている」Q10_14「私が世話をしてあげないとペットは死んでしまう」などである。既存尺度のPRS 入っている。ここではペットの世話に対する必然性や躰に対する姿勢を表している。さらに、躰に関しては気を遣いつつも、ペットの要求に対してつい応えて甘やかしてしまう、という飼い主の態度も示されている。「身体的甘やかし」因子と名付ける。

第3因子は Q10_6「ペットに自分の食物を分けてやることがある (PRS)」Q10_7「ペットが興味を持つようなら、食べられるものは何でも与えている (PRS)」Q10_13「私はペットを甘やかしていると感じている」などである。ここではペットに食べ物を与えることに対し理性を失い、感情に引きずられた飼養態度の甘さが示されている。「食物的甘やかし」因子と名付ける

第4因子は Q10_15「ペットが嫌がるしつけはしたくない」Q10_12「ペットの望みをなんでもかなえてあげたい」Q10_14「私が世話をしてあげないとペットは死んでしまう」などである。ペット側に主眼がありペットに主体性をもたせ、飼い主がペットに従うペット主導型の飼養態度が示されており、躰の甘さが表れている。「躰的甘やかし」因子と名付ける

このように、ペット飼育に関する項目は、“飼養的満足”“身体的甘やかし”“食物的甘やかし”“躰的甘やかし”から構成されている。

3-4 “ペットとの情緒的な交流”

『ペットとの情緒的な交流』に関する21個の質問項目について因子分析をおこなった結果、3因子が抽出された。第1因子は Q11_4「私はいつもペットを信頼している (LAPS)」 Q11_3「私とペットは親密な関係にあると感じている (CABS)」 Q11_2「ペットは私を裏切らないと思う」 Q11_5「私が泣きたいときペットは肩をかしてくれる存在である」 Q11_8「ペットは私が取り乱してしまっているのに気づいて私のことを慰めようとする」 Q11_9「ペットは私を信頼している」 Q11_11「私はペットが自分の呼びかけに応えていると感じている (CABS)」 Q11_14「ペットは私のことを理解している (LAPS)」 Q11_10「ペットは絶えず私のそばにいる (PRS)」などであり、既存尺度の LAPS、CABS、PRS が混在している。ヒトからペットへの信頼感とペットからヒトへの信頼感が、相互に働きかけをもつ関係性を表している。「信頼」因子と名付ける。

第2因子は Q11_19「嬉しいことがあるとペットに報告する」 Q11_16「ペットと旅行をすることがある (CABS)」 Q11_20「ペットとテレビを見たりドライブするなど、いつも一緒に遊んであげている (PRS)」 Q11_6「自分の辛いことや悲しいことをペットに聞いてもらうことがある」 Q11_17「常日頃ペットに様々なことを話しかけながら接触している」 Q11_15「誕生日や特別な時にペットに贈り物をする (PRS)」 Q11_11「私はペットが自分の呼びかけに応えていると感じている (CABS)」 Q11_13「ペットは私の気分が悪いときにはそれに気づいている (LAPS)」などであり、既存尺度の CABS、PRS、LAPS が混在している。生活の中に常に隣にペットが存在すること、またヒトとペット相互の関係は情緒的であり特殊であることを意味する。「感情伝達」因子と名付ける。

第3因子は Q11_18「ペットを抱いたり、なでたりしてかわいがっている (CABS)」 Q11_1「私はペットに話かけ、ペットの気持ちをわかれようとする (PAS)」 Q11_7「私はペットの気持ちの変化にいち早く気づくことが出来る」 Q11_12「ペットは私のことをよくわかっていると思う (PAI)」 Q11_11「私はペットが自分の呼びかけに応えていると感じている (CABS)」 Q11_21「ペットは私のそばで寝ている (CABS)」などであり、既存尺度の CABS、PAS、PAI が混在している。第2因子が情緒的な関係であるのに対し、第3因子は

ペットの存在自体がごく自然で普通の状態であり、生活にとけ込んだ存在であるとする気持ちの表れだと解釈される。「感情理解」因子と名付ける。

このように、ペットとの情緒的な交流に関する項目は、“信頼”“感情伝達”“感情理解”から構成されている。

3-5 “ペットから得られる効用”

『ペットから得られる効用』に関する24個の質問項目について因子分析をおこなった結果、3因子が抽出された。第1因子は Q12_9「ペットは私を幸せな気分にしてくれる (LAPS)」 Q12_6「ペットを飼うことで慈しみの心が生まれる (CCAS)」 Q12_11「ペットに触れることで気分が落ち着き心が安らぐ (CCAS)」 Q12_5「ペットは私に安心感を与えてくれる (CCAS)」 Q12_3「私にとってペットは保護しなければならない対象である (CCAS)」 Q12_1「ペットは私を笑わせたりして私を楽しませてくれる (CCAS)」 Q12_2「ペットと私は親密な関係である (CABS)」 Q12_15「ペットがいるから楽しい時間がある (CCAS)」 Q12_4「ペットは私に自分が必要だと感じさせる (CCAS)」 Q12_8「ペットが私を信頼していると感じる (CCAS)」 Q12_10「ペットは私の精神的支えである」 Q12_17「ペットは私を楽しませたり笑わせたりする (CCAS)」 Q12_7「ペットが私を愛していると感じる (CCAS)」などであり、既存尺度の LAPS、CCAS、CABS が混在している。中心的領域は CCAS であり、ペットから受ける情緒的な快適さと、そのことによる心理的な安心感に特徴がある。「精神的安定」因子と名付ける。

第2因子は Q12_21「ペットは自分の交友関係を広げてくれると感じる」 Q12_24「ペットを通じて親しい友達や知り合いができた」 Q12_23「私はペットの写真を他の人々に見せて楽しんでいる (LAPS)」 Q12_20「私は人がペットに対する反応の仕方によってその人を判断している (LAPS)」 Q12_19「ペットについて他の人と話することがある (PAI)」 Q12_22「ペットに関することなら知らない人とでも気楽に話せる」 Q12_18「ペットを愛することが私の健康維持に役立っていると思う (LAPS)」などであり、既存尺度の LAPS、PAI が混在している。ペットを通じて他者との関係が生まれ、そのことがヒトの心理的な健康維持に繋がっていることを意味する。「精神的健康」因子と名付ける。

第3因子は Q12_14「私はペットのおかげで活動的な生活をおくることができる (PRS)」 Q12_13「ペットがいるので朝早く起きるなどの規則正しい生活をしている (PRS)」 Q12_12「ペットがいるおかげで体を動かすことが多くなる (CCAS)」 Q12_16「ペットは私に堅実な生活をさせる源である (CCAS)」 Q12_18「ペットを愛することが私の健康維持に役立っていると思う」などであり、既存尺度の PRS、CCAS、LAPS が混在している。ペットの散歩などを通して体を動かすこと、規則正しい生活を強いられることが、逆にヒトの健康に関与することを意味している。「肉体的健康」因子と名付ける。

ペットから得られる効用に関する項目は、“精神的安定” “精神的健康” “肉体的健康” から構成されている。

3-6 “ペットに関する一般的感覚”

『ペットに対する一般的感覚』に関する29個の質問項目について因子分析をおこなった結果、6因子が抽出された。第1因子は Q13_3「ペットなんかの世話をするかわりに、ほかのことを考えるようになれば世の中はもっとよくなると思う (PAS)」 Q13_1「ペットを飼うことはお金のむだ使いである (PAS)」 Q13_14「私は動物がキライである」 Q13_4「ペットはおもしろいしかないが、自分で飼うほどのことはない (PAS)」 Q13_17「私はあまりペットに愛着を感じていない (LAPS)」 Q13_2「ペットはいつも戸外で飼うべきだと思う (PAS)」 Q13_12「動物は家庭で飼うよりも、野生のままにしておくか動物園で飼うべきである (PAS)」 Q13_5「ペットを飼うことは意味がない」 Q13_15「しょせんペットはペットにしかすぎず、モノである (LAPS)」などであり、既存尺度の PAS、LAPS が混在している。全てが反転項目である。ペットを飼うということは、ペットと自分の生活の一部を共有するということであり、意義ある特殊な関係を作る、という気持ちを表す因子であると解釈される。「存在意義」因子と名付ける。

第2因子は Q13_11「ペットを飼うことで人は情緒豊かな社会を作れると思う」 Q13_13「私はペットが好きである (PAS)」 Q13_9「ペットを飼っていると幸福感が増す (PAI)」 Q13_28「私にとってペットは保護の対象である」 Q13_10「私は自分の手で動物にエサを与えるのが好きである (PAS)」 Q13_18「マナーのなっていない飼い主が多いと感じることがある」 Q13_20「ペットを

家の中で飼おうとすれば、家具がいたむことを覚悟しなければならない (PAS)」 Q13_27 「ペットの生涯を通じて面倒をみるのは飼い主の義務である」 などであり、既存尺度の PAS、PAI が混在している。ペットを飼うことで発生する事象、または社会規範を表している。ペットの存在意義とはポジティブな心理的作用を生みつつも、特有の社会通念が生まれるといった気持ちの現れと解釈する。「社会通念」因子と名付ける。

第3因子は Q13_8 「私はペットを飼うことで優越感を感じる事が出来る」 Q13_21 「できれば流行のペットが飼いたい」 Q13_16 「ペットも血統証などのブランドがあった方がよいと思う」 などである。ここでの意味はペットを飼うことがヒトの虚栄心を刺激し、そのことで他者よりも優位な立場でいられる、という心理が働いていると解釈する。「虚栄」因子と名付ける。

第4因子は Q13_29 「ペットは人間と同じくらい尊敬に値するものである (PRS)」 Q13_26 「私はペットもヒトと同等の権利や特権が与えられるべきだと思う」 などであり、既存尺度の PRS が入っている。ペットとはヒトと同様に価値ある存在であり、優越的な権利をもてるものだという気持ちを表している。「絶対的価値」因子と名付ける。

第5因子は Q13_25 「ペットは私の部屋で寝ている (CABS)」 Q13_24 「出かけるときは常にペットを連れている」 Q13_23 「ジョギングや散歩をするときはペットも一緒である (PRS)」 などであり、既存尺度の CABS、PRS が混在している。ペットの存在とは傍にいて当たり前の、ごく身近な存在でありつつも、いつも一緒の大事な存在であると解釈される。「存在感」因子と名付ける。

第6因子は Q13_22 「私はペットとよく遊ぶ (PAI)」 Q13_22 「ペットは生活を楽しくしてくれる (PAS)」 Q13_22 「ペットを飼うことは他人に迷惑をかける」 などであり、既存尺度の PAI、PAS が混在している。ペットとはヒトの生活を肉体的にも精神的にも快適にしてくれるものだ、という気持ちを表していると解釈する。「快樂」因子と名付ける。

ペットに対する一般的感覚に関する項目は、“存在意義” “社会通念” “虚栄” “絶対的価値” “存在感” “快樂” から構成されている。

3-7 “擬人化とコントロール感”

『ペットの擬人化とペットに対するコントロール感』に関する16個の質問項

目について因子分析をおこなった結果、4 因子が抽出された。第 1 因子は Q14_5「私にとってペットとは恋人又は夫や妻のようなものである」Q14_6「私にとってペットとは親友のようなものである (PAI)」Q14_3「私は悩み事についてペットに話しかける (PAS)」Q14_12「本当の家族よりペットの方が家族らしいと感じる」Q14_7「私にとってペットとは兄弟のようなものである」Q14_1「ペットは友達以上に大切なものである (PAS)」Q14_4「私にとってペットとは子供のようなものである」Q14_2「ペットはかけがえのない伴侶であると思う (LAPS)」などであり、既存尺度の PAI、PAS、LAPS が混在している。ペットに対して家族や友達のような極めて近い存在であると感じており、また、ペットとはかけがえのない親しみ深い存在としての役割を果たしている、という気持ちを表していると解釈する。「親近感」因子と名付ける。

第 2 因子は Q14_13「ペットは家族のメンバーであり、家族と対等である (PRS)」Q14_11「ペットは家族の一員と同じように、尊敬の念をもって扱われるべきである (PAS)」Q14_10「ペットとはかけがえのない、代わりのきかない存在である」Q15_3「ペットは私のことを評価したりしないので、私はペットを愛している (LAPS)」などであり、既存尺度の PRS、PAS、LAPS が混在している。ペットの存在は家族同様であり、代わりのきかない無二のものであることを示している。この因子は「家族成員」因子と名付ける。

第 3 因子は Q15_2「飼い主はペットに対して絶対的な力をもっている」Q15_1「ペットは私の周囲の誰よりも私に忠実なので、私はペットが好きだ (LAPS)」Q15_3「ペットは私のことを評価したりしないので、私はペットを愛している (LAPS)」などであり、既存尺度の LAPS が入っている。ここでの意味は、ペットと飼い主の主従関係や支配性を示しており、その力関係があるがゆえに愛情を持って飼育できる、ということを表していると解釈される。「支配性」因子と名付ける。

第 4 因子は Q14_8「ペットの役割はロボット犬や人形でも同じことである」Q14_9「私にとってペットはペットであり、それ以上の何者でもない」などである。全て反転項目である。ここでの意味はペットとは飼い主にとって特別な存在であり、代替不可能な価値ある存在であることを示している。「代替不能」因子と名付ける。

ペットの擬人化とペットに対するコントロール感に関する項目は、「親近感”

“家族成員”“支配性”“代替不能”から構成されている。

4. まとめと考察

本研究では「ペットに対するヒトの意識」を調べるため、ペット意識尺度の再構成を試みた。信頼性・妥当性の高い従来の尺度を使用し、また、それだけでは測りきれない項目を加えて質問紙法により探索的に調査することを目的とした。質問紙調査結果について領域ごとに因子分析の結果抽出された因子からペット意識の内容を検討する。

(1)「ペット飼育に関する意識」からは、なぜヒトはペットを飼うのか、その利点とリスクとはなにかについて分析から明らかになったことを以下3点あげる。第一に「ペットとは見た目にも可愛らしく、保護したい、守りたいという人間の欲求を満たすものである。時には話し相手になり慰めてくれるなど、ぬいぐるみやロボットにはない相互作用が可能なものであり、またそのような存在を得たい」という意識が働いている。第二に「ペットがいることで心が満たされる。そのことは飼い主の生活に影響を及ぼし、喜ばしい結果が生まれる」と考えている。第三に「ペットとは生き物であるので、病気もすれば糞尿の始末も世話しなければならない。自分とは違う生体なので躰や種固有の問題には困難やとまどいを感じる」という意識が読み取れる。ペットブームの要因の一つには、上記に挙げた飼育理由や飼育利点のようなヒトの欲求が存在しているため、と考えられる。

(2)「ペットに対する愛着」からは、「ペットの存在が自分を楽しくさせてくれる。ペットとは尽くしてあげねばならない対象であり、代替不可能な存在である。また心の支えである」といった意識が働いている。Johnsonら(1992)の作成したLAPS(ペットに対する愛着を測定する尺度)における因子分析結果は「一般的な愛着(*general attachment*)」「人の代理としてのペット(*people substituting*)」「動物の権利/福祉(*animal rights/animal welfare*)」であった。これと比較すると本研究では、ペットに対してより複雑な愛着の形が存在することを示唆した結果となった。

(3)「ペット飼育」からは、飼い主はペットを飼育することについて「ペットを飼っているだけで満足だ。世話や躰に対して責任は感じつつも、つい食べ物

を余分に与えてしまうなど甘やかしている」と意識している。ここで明らかになった飼い主の飼育意識とは、飼い主の中に、躰の必然性の認識と感情に流された甘やかしという、相反する感情があることである。このことは現在のペットブームの負の側面である飼い主の問題行動にも言及でき、ペット飼育の難しさを語っていると考えられる。

(4)「ペットとの情緒的な交流」からは、飼い主とペットとの交流は「互いに信頼しあい、意思の疎通ができる関係」であることが分かった。この項目の領域は、ペットとの情緒的絆や愛情豊かな行動、ペットからの信頼に特徴があったが、同じ結果となった。

(5)「ペットから得られる効用」からは、ペットが存在することで「安らぎを得るなど情緒的に快適な状態になる。ペットを介して他者との関係が生まれるなど、精神的に健康になれる。また体を動かすことが多くなり肉体的にも健康である」との意識を得ていることがわかった。ペットからの心理的サポートや飼育の効果、他者との交流とその影響といった特徴が現れていた。飼い主はペットから心理的効果と社会的効果の両方を得ていると考えられる。

(6)「ペットに対する一般的感覚」からは、「ペットとは絶対価値の存在であり、自分を楽しませてくれる。その存在は情緒豊かな社会作りに貢献できるなど、特有の社会通念を生む。しかしペットを飼うことで優越感を感じることができるなど、所有物としての側面も持つ」と意識していることが分かった。命あるものとしての尊厳や影響力を認めつつも、ペット所有が他者より優位に立つことの一種のステータスとして捉えられていることの表れではないか。血統証付ペットといった“ブランド”を過度に求める傾向は、ペットブームの大きな問題でもある。転じて命の軽視化にもつながりかねず、日本人飼い主のペット観における負の側面であろう。

(7)「ペットの擬人化とペットに対するコントロール感」からは、「ペットとは飼い主に支配権があるものの、家族またはそれに順ずる親しい存在であり、無二の存在である」との意識をもっている。この項目の領域は、ヒトの代替としての関係、家族との対等性、ペットに対するコントロール性に特徴があったが、同じ結果となった。今や「ペットは家族である」との認識も社会一般的に

表-1 分析項目におけるヒトのペット意識

分析領域	ペットに対するヒトの意識
飼育意識（理由・利点・リスク）	保護欲をかきたてる・相互作用可能（話相手）・満足感・躰や世話の困難
愛着	心の支え・存在により快感
飼育	甘やかし・躰の困難
情緒的交流	情緒的絆・相互の信頼
効用	精神的健康・身体的健康・他者交流
一般的感覚	絶対的価値・情緒豊かな社会作りに貢献・優越感
擬人化とコントロール感	家族のような存在

普及し、定着していると捉えられる。以上の結果を、表-1に整理してまとめる。

ヒトにとってペットとは、相互に信頼感や絆をもてる関係であり、躰や世話の困難を感じつつも、愛情の注げる、家族同然の存在である。そしてそのことは個人の心理的な満足感を生み、結果として自己の精神的・身体的健康に繋がる、と捉えられていた。これらの結果は従来の知見とともに、ペットとは家族同様に愛情を注ぐことが可能な対象であると、ヒトが意識していることの裏付けになり、非常に興味深い。「ペットだけど家族である」「動物だけど愛情の対象」という認識は、現代社会において十分通用するものになりそうだ。

本研究で使用した尺度は、ペットに対する態度尺度 (PAS)、人とペットの関係を測定する尺度 (CABS)、ペットに対する愛着を測定する尺度 (PAI)、ペットに対する態度とペットとの関係尺度 (PRS)、ペットに対する愛着を測定する尺度 (LAPS)、飼い主がペットから受けた情緒的な快適さ尺度 (CCAS)、及び総理府で実施された世論調査によるものであった。本研究ではこれらを一度すべてバラバラに分解し、7つの領域に組み直し独自の尺度を加え、各領域がどのような要素で構成されているのかを整理し直したものである。ヒトはペットに対して先述の7領域にわたる意識を抱いており、従来の知見では得られなかった「ヒトとペットの関係」の新たな側面が見出された。日本においてこの領域の研究は未だ数少なく、その点において本研究は意義があると考えられる。この分野の研究が進むことによって、ペットブームが抱える問題に解決の道を見出すことも予測されるだろうし、さらにはより積極的に高齢化・少子化社会におけるペット活用の道を広げることも予測されるという意味で、大いに社会的意義があると考えられる。

参考文献

- 安藤孝敏 (1999) 「ヒューマンアニマルボンド入門第8回 人とペットの関係を評価する尺度 (その1)」『PROVET』 November、58-61頁。
- 安藤孝敏 (1999) 「ヒューマンアニマルボンド入門第9回 人とペットの関係を評価する尺度 (その2)」『PROVET』 December、58-61頁。
- クリップ生活研究所(株) (2002) 『1兆円市場 ペットビジネスのすべて』日本能率協会マネジメントセンター。
- 濱野佐代子 (2004) 「コンパニオンアニマル (犬) 喪失後の飼主の心理過程——犬の喪失原因別にみた、飼主の喪失感情」『アニマル・ナーシング』9(1)、58-62頁。
- Johnson, T. P., Garrity, T. F. and Stallones, L. (1992), “Psychometric evaluation of the Lexington attachment to pets scale (LAPS),” *Anthrozoos*, 5, pp. 160-172.
- 香取章子 (2004) 『ペットロス』新潮社。
- 金児恵、金度希 (2004) 「コンパニオン・アニマルとの愛着関係のタイプと社会的ネットワーク」『日本社会心理学会 第45会大会』206-207頁。
- Lago, D., Kafer, R., M. and Connell, C. (1988) “Assessment of favorable attitudes towards pets: Development and preliminary validation of selfreport pet relationship scales,” *Anthrozoos*, 1 pp. 240-254.
- 諸井克英 (1984) 「孤独感とペットに対する態度」『実験社会心理学研究』日本ダイナミクス学会、第24巻1号、93-103頁。
- 内藤武史 (2006.4.28) 「大和総研／コラム・ペット供養課税論争の背景」 <http://www.dir.co.jp/publicity/column/060428.html>、2007.6.16.
- Poresky, R. H., Hendrix, C., Mosier, J. E. and Samuelson, M. L. (1987) “The companion animal bonding scale: Internal reliability and construct validity,” *Psychological Reports*, 60, pp. 743-746.
- Stallones, L., Marx, M. B., Garrity, T. F. and Johnson, T. P. (1988) “Attachment to companion animal among older pet owners,” *Anthrozoos*, 2, pp. 118-124.
- Templer, D. I., Salter, C. A., Dickey, S., Baldwin, R. and Veleber, D. M. (1981) “The construction of a pet attitude scale,” *The Psychological Record*, 31, pp. 343-348.
- 横山章光 (1996) 『アニマル・セラピーとは何か』NHK ブックス。
- 横山章光、山本央子 (2005) 「コンパニオン・アニマルをめぐる課題——特にペットロスと動物虐待、そしてアニマル・セラピー」『公衆衛生』69(12)、971-975頁。
- Zasloff, R. L. (1996) “Measuring attachment to companion animals: A dog is not a cat is not a bird,” *Applied Animal Behavior Science*, 47, pp. 43-48.